

アリストテレス受容におけるガレノスの論理学の諸論点

高橋 祥吾

1 はじめに

アリストテレスの論理学、特に三段論法は後代の哲学者たちに広く受容されてきたように思われる。これは、アリストテレスの論理学が他の哲学者のそれよりも特段に優れていたために後代の人々に受け入れられてきたというわけではないように思われる。アリストテレス以後の哲学者たちがそれぞれの理由で論理学を必要として、必要に応じてアリストテレスの論理学を受容しているのであろう。例えば、ストア派はアリストテレスを受容せずに、独自の論理学を打ち立てている。それに対して、紀元2世紀以降では、ポルピュリオスをはじめとした新プラトン主義者は、アリストテレスとプラトンの合致という考えに基づいて、アリストテレスの論理学を註解している。アプレイウスに帰される『命題について』もまた、プラトンとアリストテレスの合致という考えに依拠しているという¹。ポルピュリオスよりも少し前の人であるガレノスからは、新プラトン主義以降の伝統とはまた違った形でのアリストテレスの受容のあり様を見ることができ的可能性がある。そこで本稿は、ローマの医者ガレノスについて、彼の論理学がどのような特徴を持っているのか、特にアリストテレス論理学からの影響という点を意識しつつ、整理していくことを目的としている。そこで、まず、ガレノスの生涯や医者としての経歴などを、特に論理学に関わる部分を中心にごく短く概観し、論理学に関する著作の一覧をあげる。その上で論理学に関する主要な著作である『論証について』と『論理学入門』に関して概観し、最後にアリストテレスの三段論法と関わりのある「ガレノス格」の問題について触れることにしたい。

2 ガレノスの生涯と著作

ガレノスは建築家の息子として129年²にペルガモンに生まれた。ガレノス『自著について』によれば、彼は論理学に関する知識を若いうちから学んでいたという。これは、父親の教育方針だったらしく、15歳まで学んでいたようである(XIX 59 K)³。ガレノスは、若い頃にクリュシッポスの三段論法に関する覚書を執筆していたことを述べている(XIX 43 K)が、あとで挙げる多くの著作がいつ頃に執筆されたのかは明確には述べていない。

16歳の時に父親の夢のお告げにしたがって、医者としての教育を受けることになる。父親の死後にペルガモンを離れ、アレクサンドリアなどで医学を学び、その後ペルガモンに戻り、そこで剣闘士相手の医者となる。30歳前半にローマに赴き、166年にローマの疫病を避け、ペルガモンに戻ったという。その後、マルクス・アウレリウス帝に召喚されローマに戻り、皇帝の息子コンモドゥスの侍医として過ごすことになったという。ガレノスの晩年については、詳しくはわからない部分が多いが、192年のローマの大火で著作の多くが失われたようである⁴。

論理学に関する著作はどのようなものがあつたのか、まずは『自著について』から論理学に関する著作を以下に列挙していく。

¹小島 2017, 4.

²内山(1998, 244)は131年説をとるが、土屋(1998)をはじめとした他の多くの解説に従って129年とする。

³ガレノスの引用は、Kühn版の巻数とページ数で示す。

⁴以上のガレノスの生涯についての記述は、土屋(1998, 31-34)と内山(1998)に基づく。土屋の説明の方が詳細であるが、今回まとめるに当たって要点を内山の記述を参考にした。

- 『論証について』15巻 (XIX 41 K)
- 『論証に必要なことについて』1巻 (XIX 43 K)
- 『論証を述べる時に省略される前提について』1巻
- 『等価な前提について』1巻
- 『「なぜ」に関する論証について』1巻
- 『三段論法の数について』1巻
- 『範例について』1巻
- 『帰納について』1巻
- 『似たものについて』1巻
- 『類似性について』3巻
- 『仮定からの原理について』1巻
- 『我々の自然的な言語における類と種とこれらに関連する語の意味について』1巻
- 『可能性について』1巻 (XIX 44 K)
- 『多様な意味で語られるものについて』3巻
- 『可能な命題について』1巻
- 『諸学問⁵に共通なものと固有なものについて』1巻
- 『自分自身を逆転させる命題について』3巻
- 『可能な命題について』1巻
- 『合成された前提からの三段論法について』1巻
- 『自らを論駁する議論について』1巻⁶
- 『いかにして名辞と意味に関する研究から事物に関する研究を区別すべきか』1巻
- 『クレイトマコスと彼の論証の解決について』1巻⁷
- 『共通のロゴスについて』2巻⁸
- 『最良の教えについてファウオリヌスへ』⁹
- 『エピクテトスについてファウオリヌスへ』¹⁰
- 『三段論法の有用性について』

⁵τέχνη を土屋にしたがって「学問」と訳している。

⁶土屋は『自分自身を逆転させる命題について』と訳し、注では Ilberg を参照しつつ「命題の换位を扱ったものか」と注記している。しかし、この箇所の *περιτρεπόνων* は、Morison (2008, 66) のように *refute* と訳すべきものだろう。

⁷土屋は *λύσεων* を「反駁」としているが、Morison と同様「解決」(solution) と訳す。LSJ では *refutation of an argument* という意味が掲載されていて、アリストテレスの『ソフィスト的論駁』179a27 と『弁論術』1402b23 が挙げられている。しかし、このアリストテレスの出典部分も「解決」や「解消」と理解して問題ない箇所である。

⁸土屋は「理性」、Morison は *reason* と訳している。

⁹土屋は『最良の教えについてファウオリヌスへの反論』と訳している。この著作は『最良の医者について』*De optima doctrina* (I 40-52 K) に該当する。

¹⁰土屋は『エピクテトスについてファウオリヌスへの反論』と訳している。

『最良の学派について』1巻¹¹

『名辞の正しさについて』3巻

『存在するもののそれぞれは一でも多でもあることについて』

『同一のことが互いに対立することから必然的に帰結することは不可能であるという主張について』1巻

『論証的発見について』

『特に共通の観念についての哲学者との対話』テキストの関係で不確かになっている部分である。

『名辞を悪意を持って聞く人たちに対して』1巻

『諸学問の構成』3巻¹²(XIX 45 K)

『種と類に関する言語とそれらに付随する語の意味について』

『論証理論の梗概』1巻

『学説における相違点の判定について』

『量は第一実体と不可分であること』1巻

『不可能による論証について』1巻

『何かのために生じたものについて』1巻

『名辞と意味に関する研究について』

またガレノスはプラトンについても、論理学に関わる著作を残している (XIX 46 K)。『プラトンにおける論理学理論について』と『『ピレボス』における類による推論について』である。

アリストテレスの哲学に関する書として挙げられている著作は全て論理学に関わるものである。またテオプラストスやエウデモスの著作に関する註解もある (XIX 47 K)。

『命題論』註解 3巻

『分析論前書』第1巻の註解4巻、第2巻の註解4巻

『分析論後書』第1巻の註解6巻、第2巻の註解5巻

『十のカテゴリー』の註解4巻

テオプラストス『肯定と否定について』註解6巻

「多義性」についての註解3巻

エウデモス『語法について』註解3巻

『なぜに関する論証について』1巻

『合成された前提からの三段論法について』註解

『語法による詭弁について』1巻

¹¹この著作と同じ名前の作品が現存しているが (*De optima secta ad Thrasybulum* [I 106–223 K])、偽作と考えられている。土屋 1998, 57 (注)127、Singer 1997, 402 (p. 19, note) を参照。

¹²この著作は、土屋 1998, 57 (注)130、Singer 1997, 402 (p. 20, note) によると、『パトロピロスに宛てた医学の構成について』の第3巻にあたるという。

ここに挙げられた著作のほとんどが失われている。この中でもっとの重要な著作は『論証について』である。ガレノス自身が、複数の著作の中で『論証について』の名前を出している。また、『自著について』では、『論証について』を読むことを勧めている。しかしながら、この著作は現存していない。ガレノスの論理学に関わる著作の中で現存しているものは『論理学入門』になる。しかし、この著作は、『自著について』で挙げられていない作品である。以下では、この二つの著作について、概観していく。

3 『論証について』と論証の理論

繰り返しになるが、『論証について』はガレノスの論理学に関する著作の中で最重要のものであるが現存していない。しかし、論証に関する事柄を他の著作で述べており、その内容から『論証について』で語られていたであろうことが推察できる。例えば『ヒポクラテスとプラトンの学説』第2巻では次のように述べられている。

また、想定のうちで特有でないものは、それが本性上どれだけあるかを『論証について』という論考において徹底的に語っておいたが、その中で論証的な方法とは総じていかなるものであるのかを明らかにし、さらにこの論考¹³の第1巻を通じて、いかなる事柄についてであれ、論証に努めようとする者は、まずその訓練を積むべきことを奨励しておいた¹⁴(*PHP* V 213 K)

ここで述べられている「想定」(*λήμμα*)は、議論の前提となるものである¹⁵。この引用の直前でガレノスは、間違った議論の想定として、その想定が明白な誤りである場合と、問題に対して特有でない場合があると述べている(*PHP* V 212 K)。アリストテレスは、論証の原理は証明されるものに特有である(*οικείος*)べきだと考えていて、『分析論後書』の中で、*οικείος*という言葉を用いている箇所がある(*APst.* 71b23, 72a6, 75b38)。アリストテレスは「想定」(*λήμμα*)という言葉を用いていないが、この引用箇所ではガレノスが述べている「想定」は、アリストテレスの言う「原理」(*ἀρχή*)に相当するだろう。実際、この引用の直後でガレノスは、論証に関する最良の著作として『分析論後書』をあげている(*PHP* V213 K)。ガレノスは、ペリパトス派の人々なら弁論術的な想定を論証で使ったりしないだろうが、ストア派のクリュシッポスはそういった間違いを犯してしまっているという趣旨の批判をしている(*PHP* V 213-4 K)。

ガレノスが述べる「想定」には少なくとも四つの種類がある。一つは論証で用いる学知的想定である。他に、弁論術的想定、ソフィスト的想定、問答法的想定が挙げられている(*PHP* V 220-1 K)。このうち、問答法的想定は、訓練用の想定と言われたり、トピカ的と呼ばれたりもしている(*PHP* V 221 K)¹⁶。ガレノスは、ソフィスト的想定は、『ソフィスト的論駁』で扱われ、弁論術的想定は、『弁論術』で、問答法的想定は『トポス論』で、学知的想定は『分析論後書』で扱われていると言う(*PHP* V 222 K)。アリストテレスの論理学にある程度対応するものとして、ガレノスは自身の論理学を自覚的に位置付けていることが窺える。

さて、ガレノスが示す推論は、例えば以下のようなものである。

¹³内山(2005, 49注(2))は、『論証について』ではなく、『ヒポクラテスとプラトンの学説』の第1巻だとしている。

¹⁴引用の翻訳は内山訳を用いているが、*οὐκ οἰκεία*の訳のみ、「不適切なもの」ではなく「特有でないもの」としている。

¹⁵内山・木原2005, 47注(4)。222 Kでは、「想定」を *πρότασις* 前提や *ἀξιωμα* 命題)と言い換えても構わないと言われている。

¹⁶この問答法的想定、呼称や議論について内山は、プラトンからの影響を指摘している。内山2005, 57注(1)。

すなわち、すべて活動状態にあるものの源はその近くにある、というのがそれである。これが真であると仮定されて、そこに観察の結果として、耳は脳に接しているという命題が付け加われば、それでも耳の活動の源は脳にあることが結論されるのであろう。しかし、感覚に対しても知性に対しても、今言われた命題、すなわち「すべて活動状態にあるものの源はその近くにある」は、第一にしてそれ自体として信じるに値するほど明白ではないのである。
(*PHP V 240–1 K*)

引用からわかる通り、この推論はガレノスにとって誤った結論を導く推論であり、その原因は前提が誤っているからである。推論部分だけを抽出して、以下に挙げる。

（前提1）すべて活動状態にあるものの源はその近くにある

（前提2）耳は脳に接している

（結論）耳の活動の源は脳にある

前提2は観察された事実として、この命題が真だと扱われている。その一方で、前提1は、第一にしてそれ自体として信じるに値しないものとしてガレノスは真であることを否定している。Singer (2021) が指摘するように、ガレノスは論証の第一の前提は、自明なものであるべきだと考え、第二の前提は、感覚に明らかであるべきだと考えている。第一の前提が、第一にしてそれ自体として信じるに値するという点は、アリストテレスもまた論証の前提に求めている特徴とほぼ一致している (*Top. A 100a25–28, 100b20–21*)。その一方で、観察された事実、感覚に明らかなのが第二の前提として要求されるということは、アリストテレスの論証の理論では自明のことではない。

4 『論理学入門』について

『論理学入門』はガレノスの論理学に関する著作の中でまとまった形で現存するものである。しかし、先にも述べたように、『自著について』の中では言及されていない。この著作は、Prantl によって偽作の疑いもかけられているが、Kalbfleisch によって Prantl の議論は斥けられている (Kieffer 1964, 3–4)。また、『等価な前提について』 (*Inst. log. 11.2*) と『論証について』 (*Inst. log. 12.1*) と『三段論法の数について』 (*Inst. log. 17.1*) への言及があるので、よりも後に書かれたものである可能性が高い。それどころか、『自著について』で触れられていないことから、『自著について』以降のかなり後の作品である可能性がある。あるいは、実は『論理学入門』がガレノス自身にとっては『自著について』で言及する必要を感じないような作品であったかもしれない。『自著について』ではクリュシッポスの三段論法についての書物の覚書についての言及があるが (*XIX 43 K*)、ガレノスにとって『論理学入門』がそのような作品であったならば、『自著について』では言及されていない可能性はあり得るかもしれない。いずれにせよ、明確な執筆時期は確定できないだろう。

『論理学入門』では、定言三段論法、仮言三段論法、関係的三段論法の三つの推論が説明されている。定言三段論法は、アリストテレスの三段論法に基づいていると考えられる。その一方で、仮言三段論法はストア派の論理学の影響を受けていると考えられる。ガレノスは自らをストア派でもペリパトス派でもないと考えているが、明らかにペリパトス派よりもストア派に批判的である。『論理学入門』の中でも、ストア派よりもペリパトス派の語彙をよく用いているし、ストア派に関する内容でもストア派の用語に代えてペリパトス派の用語を用いたりもしている (Kieffer 1964, 28)。

三つ目の関係的三段論法は、ガレノスのオリジナルであるとされている。ただし、この著作以外では見出されない。この関係的三段論法は次のようなものである。

テオンはディオンの2倍の財産を持っている。しかし、フィロンはテオンの2倍の財産を持っている。したがって、フィロンはディオンの4倍の財産を持っている。 (*Inst. log. 16.1*)

だから、この論証は、三つのものから構成される。まず最初に、第一に語られるものは、「テオンはディオンの等しい」と言うものだった。第二に、次の「フィロンはディオンの等しい」と言うものである。第三に、それらに加えて、「同じものに等しいものどもは、互いに等しい」というものである。そしてそれらから、「テオンはフィロンと等しい」と結論が導かれるだろう。(Inst. log. 1.3)

これら関係的三段論法の例は、数学に関わるものである (Kieffer 1964, 116)。確かに、アリストテレスの三段論法では、形式化できない種類の推論であろう (Hankinson 2016, 241)。また、Singer は、関係的三段論法の不可解な特徴の一つとして、三段論法の一部として、三段論法が依存する関連公理に言及する場合としない場合がある点を挙げている (Singer 2021)。先の二つの引用の二つ目 (Inst. log. 16. 1) では、確かに、関連する公理として「同じものに等しいものどもは、互いに等しい」を加えて、結論を述べているが、一つ目の引用では挙げられていない。また、関係的三段論法についての記述はそこまで多いわけではない。関係的三段論法をどの程度高く評価すべきかは課題となるだろう。

『論理学入門』で興味深い点は、プラトンの『アルキビアデス』 (Inst. log. 15. 10) と『国家』 (Inst. log. 18. 2) への言及がある所である。ガレノスの中期プラトン主義者と近い部分 (Hankinson 2016, 241, 241n11) がここに現れているように思われる。

5 ガレノス格について

アリストテレスは三段論法の最初の発見者とされているが、第 4 格は見出していなかった。この第 4 格の発見者としてガレノスの名が伝わっている。そのため、第 4 格は「ガレノス格」と呼ばれることもある。しかし、ガレノス格が本当にガレノスが発見したものであるのかは解釈が分かっている。Kneal ら (1962, 183–4) によれば、ガレノス自身が三段論法の第 4 格を認めていなかったという。しかしザバレラは、アヴェロエスが『分析論前書』の注解において第 4 格の発見はガレノスによってなされたと述べている。さらにザバレラは、それはアヴェロエスが失われたガレノスの著作の中で見出していたからだと考えている。Kneal らはこのザバレラの想定は誤りだと評価している (Kneal and Kneal 1962, 183)。ガレノスが第 4 格の発見者とされる原因について、先に挙げたアヴェロエスによるものも含めて以下のようにまとめられる¹⁷。

(1) アヴェロエスの『『分析論前書』中注解』のいくつかの箇所、ガレノスが第四格を導入したことが言及されている。これらの箇所に基づいて、ザバレラの『三段論法の四つの格について』を通してヨーロッパに「ガレノス格」が定着することになった。

(2) 1844 年に出版されたガレノスの『論理学入門』の序文を書いた Mimoides Mynas は、その序文の中で、第 4 格について、著者不明の『分析論』の註解¹⁸の断片（おそらく 6 世紀のもの）を紹介している。それによると、テオプラストスでエウデモスら、初期のペリパトス派によって、第 1 格の各式の変更が行われたものが、それ以後の学者によって第四格とされて、その学者がガレノスとされた。

(3) Prantl が見出したギリシア語断片（11 世紀のビザンティンの学者 Ioannes Italus のもの）によると、ガレノスは第四格の存在を教えていた。

¹⁷以下のまとめは、(1)–(4) については、Łukasiewicz (1957, 38–42) の説明を Rescher (1966, 2) がまとめたものを中心にして構成している。また、西牟田 (2022) も参照した。

¹⁸『分析論』の註解であるという情報は、*Encyclopaedia Britannica* 第 11 版第 11 巻 (1910–1911) に基づく。なお実際に参照したのは、The Project Gutenberg の EBook 版である。<https://www.gutenberg.org/files/37160/37160.txt> (最終閲覧 2023/2/27)

(4) Wallies がアンモニオスの『分析論前書』註解』の序文の中で、著者不明の断片を紹介している。そこで、三段論法の種類が述べられている。三段論法は、定言三段論法、仮言三段論法、付加的仮定に即した (*κατὰ πρόληψιν*) 三段論法の三つがあり、そのうち定言三段論法には、単純三段論法と複合三段論法があるという。単純三段論法は、三つの項と三つの格からできており、複合三段論法は四つの項と四つの格からできている。ガレノスは『論証について』で、この複合三段論法を論じていて、この三段論法をプラトンの対話篇の中から見出したという。

(5) Rescher (1966, 3) はガレノスが『論理学入門』の中で、三段論法の格が三つであると述べていることを指摘している。これはガレノス自身による重要な証言であるが、Rescher は、『論理学入門』が教科書的な位置付けのものであり、標準的な内容が書かれているのだから、この著作での証言だけでガレノスが第4格を見出していないと断ずることに慎重である。

これら五つのうち、(1) から (3) は、ガレノスが第4格の発見者であることを肯定する内容であると解釈できる。(1) は今日の我々が「ガレノス格」を知ることになった原因であると言える。(3) は少なくとも11世紀にはガレノスが第4格を見出した人物であるという評価が存在していたことを示している。(2) については、ガレノスが見出したわけではないという解釈も可能である。そして、第4格の発見に大きく寄与したのは初期ペリパトス派の人々であると評価することができる。その分、第4格として位置付けた人物の貢献は相対的に小さなものになるだろう。(4) と (5) はガレノスが第4格の発見者であることを否定する解釈へと導くものである。Kneal らは(4)の著者不明の断片を引用して、ガレノスが単純三段論法の第4格を見出したと解することの誤りを指摘している (Kneal and Kneal 1962, 184)。(4) からはガレノスは単純三段論法ではなく複合三段論法の四つの格を見出したということになる。この(4)における単純三段論法は、アリストテレスの三段論法のことである。複合三段論法は、Kneal らや Morison によると、四つの項を使った三つの前提をもつ推論のことで、日本語では「四段論法」とでも呼ぶべきものである。Morison (2008, 89) の説明によると、次のようなものである。

$$\begin{array}{c} \text{AaB} \\ \text{BaC} \\ \text{CaD} \\ \hline \text{AaD} \end{array}$$

この推論は、次の二つの単純三段論法第1格が結びついたものとされる。

$$\begin{array}{cc} \text{AaB} & \text{AaC} \\ \text{BaC} & \text{CaD} \\ \hline \text{AaC} & \text{AaD} \end{array}$$

複合三段論法は、二つの単純三段論法がつながったものとして理解される。複合三段論法の第1格は、単純三段論法の第1格を二つ組み合わせたものである。複合三段論法の第2格は単純三段論法の第1格と第2格を組み合わせ、複合三段論法の第3格は単純三段論法の第1格と第3格を組み合わせて作る。そして、複合三段論法の第4格は単純三段論法の第2格と第3格を組み合わせることで作られる。この複合三段論法は単純三段論法の第4格の発見と直接関係しないように思われる。したがって、この(4)はガレノスと第4格の発見との結びつきを否定するものであろう。この(4)については、ガレノスがプラトンの対話篇から複合三段論法を見出したという証言が注目に値する (Singer 2021)。Morison によれば、ガレノスが依拠するプラトンの対話篇は、『アルキビアデス』と『国家』だという (Morison 2008, 91)。Morison は『論理学入門』でも『アルキビアデス』と『国家』に依拠していることも偶然ではないと主張していて、ガレノスの論理学のオリジナリティの可能性をこの点に見出しているようである (Morison 2008, 91)。

最後に(5)については、確かに Rescher の慎重な判断もあり得るかもしれない。おそらく論理学関係の名著と言える『論証について』が執筆された時点で第4格を発見していたのであれば、『論理学入門』においても言及があっても良いように思われる。また、『論理学入門』がガレノスが執筆した真正の著作であるなら、『自著について』の中で言及がないため、少なくとも『自著』についてよりも後に執筆されたことになる。この場合も、ガレノスが第4格を見出したのが、かなり人生の後半であるのでなければ、『論理学入門』の中で言及があっても良いはずであるように思われる。ガレノス自身が第4格について言及していないという点は、ガレノスが第4格の発見者ではないという有力な根拠となり得るが、論理学についての著作は失われたものが多いだけに、どうしても決定的な判断が難しい部分が残ってしまうだろう。

ガレノスが第4格を発見したという説は疑わしい部分があるが、実際の発見者ではないとしたら、それにもかかわらず第4格の発見者と信じられたということは、注目に値するだろう。第4格を発見した人物としてガレノスが相応しいと考えられたということは、それだけ論理学に関してガレノスが一定の高い評価を得ていたという間接的な証拠であるように思われる。その評価がガレノスの論理学に内在的なものに由来するのか、何か当時やその後の社会状況などに由来するのかは検討する余地があるだろう。

6 終わりに

以上のように、ガレノスの論理学は、多くの部分でアリストテレスの論理学を下敷きにして成り立っている。ガレノスの著作は多くが失われていて、論理学の主要著作『論証について』も断片でしか残っていない。しかし、その断片からでも、ガレノスの論証の理論がアリストテレスの論証の理論を基礎としていることが推察される。しかし、「想定」のような、アリストテレスの論理学にはない用語が使われているなど、アリストテレスの論証理論をそのまま受け入れているわけでもない。ガレノスの論証理論の独自性が、何に由来するのか、またその独自性が医学と関係するのかという点は今後検討に値するであろう。複合三段論法や『論理学入門』における関係的三段論法も、ガレノス独自の発見である可能性は高い。そして、これらの三段論法の発見には、プラトンの対話篇が関係している可能性がある。ガレノスがプラトンの対話篇を分析して、独自の三段論法を見出したという可能性は、とても興味深い点である。

参考文献

- [1] Falcon, A. (ed.), 2016, *Brill's Companion to the Reception of Aristotle in Antiquity*, Leiden: Brill.
- [2] Hankinson, R. J. (ed.), 2008, *The Cambridge Companion to Galen*, Cambridge: Cambridge University Press.
- [3] Hankinson, R. J., 2016, "Galen's Reception of Aristotle," in Falcon 2016, 238–257.
- [4] Kieffer, J. S. 1964, *Galen's Institutio Logica*, Baltimore.
- [5] Kneale, W. and M. Kneale, 1962, *The Development of Logic*, Oxford.
- [6] Łukasiewicz, J. 1957, *Aristotle's Syllogistic: From the standpoint of modern formal logic*, 2nd edition, Oxford: Clarendon Press.
- [7] Morison, B., 2008, "Logic," in Hankinson 2008, 66–115.
- [8] Rescher, N. 1966, *Galen and the Syllogism*, Pittsburgh: University of Pittsburgh Press.

- [9] Singer, P. N., “Galen,” *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Winter 2021 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL = <<https://plato.stanford.edu/archives/win2021/entries/galen/>>.
- [10] Singer, P. N., 1997, *Galen: Selected Works*, Oxford: Oxford University Press.
- [11] 内山勝利・木原志乃（共訳）, 2005, 『ガレノス『ヒッポクラテスとプラトンの学説』』, 西洋古典叢書, 京都大学学術出版会.
- [12] 小島和男, 2017, 「アプレイウスにとっての哲学とは何か?」, 『学習院大学文学部研究年報』 64, 1–17.
- [13] 種山恭子（訳）・内山勝利（編）, 1998, 『ガレノス『自然の機能について』』, 西洋古典叢書, 京都大学学術出版会.
- [14] 土屋睦廣, 1998, 「ガレノスの自己文献解題『自著について』—序論・翻訳・訳注」, 『明治薬科大学研究紀要. 人文科学・社会科学』 28, 31–59.
- [15] 西牟田祐樹, 2022, 「ガレノスと三段論法第四格について (1)」, *Asinus's blog*, 更新日 2022. 1. 26, 最終閲覧 2023. 3. 1. URL = <<https://incognito0.hatenablog.com/entry/2022/01/26/205933>>

（たかはし しょうご、徳山工業高等専門学校 [哲学]）

Research note about Galen's Logic in the Reception of Aristotle

TAKAHASHI Shogo

In this research note, an overview of Galen's logic is briefly summarized from the perspective of the reception of Aristotle's logic. Galen's logic is largely based on Aristotle's logic in many respects. Almost all of Galen's writings have been lost, and his major work on logic, *On Demonstration*, only has survived in fragments. However, even from those fragments, it can be surmised that Galen's theory of demonstration is based on Aristotle's theory of demonstration. However, Galen does not simply accept Aristotle's theory of demonstration, as he uses terms such as "assumption" that are not found in Aristotle's logic. It is worth considering what Galen's originality in the theory of demonstration derives from and whether his originality is related to his medical art. There is a high possibility that Galen's discovery of the composite syllogism and the relational syllogism in his *Introduction to Logic* is also unique. Furthermore, it is possible that Plato's dialogues are related to the discovery of these syllogisms. It is a very interesting point that there is a possibility that Galen analyzed Plato's dialogues and discovered his own syllogisms.